巻頭言

名古屋大学医学部保健学科
太田　　進

論文を書くと言うこと

私が初めて論文を書いたのは,理学療法士となって2年目のことでした．そのきっかけは,初めての学会発表での2つの経験からでした．1つは発表後，座長の質問にうまく答えられず悔しかったこと，もう一つは自分が言いたかったことがそこで聞いて頂いた方だけへの情報で終わってしまうことへの無念さのようなものでした．多くの時間を費やして準備し,自分では内容も自信を持って(？)まとめた発表でした． 皆さんの中にも学会発表で終わった後に，充実感よりも何か「これで終わり」という感覚に見舞われた方も多いと思います．

そのような気持ちから，自分の知り得た情報を他の方に形として提供したいと思い，論文投稿をすることにしました．

投稿から2年弱掛かり論文が理学療法学に掲載されました．初めて論文採択された時の充実感は，忘れることができません．発表とは，全く感覚が異なりました．

さて，この経験からその後も論文投稿を自分の臨床研究の最終目標と考えて来ました．しかし論文投稿には査読があり，査読者から(著者にとっては)厳しいコメントが戻り，コメントへの返答に大変苦労することになります．査読者はその研究領域に詳しい方がなります．そのため，踏み込んだ領域にも質問がおよび研究全体の科学性・普遍性が問われます．発表の時のように,数分の質疑応答時間で終わるわけではありません．文章として残り,質問に対して理路整然と自分の意見を展開しなければなりません．そのようなやり取りを数回経て通常論文は採択されます．その過程が厳しいからこそ達成感もあり，何よりも内容が科学性を持ったものになります．論文を投稿された方はご存じだと思いますが，掲載された論文を読み返すと初めに投稿した論文よりも質が向上していることに気が付くはずです．

その後私は大学教員となりましたが，アカデミックな世界では論文作成は，まさにその成果になります．私も以前impact factorのある国際論文の査読をさせて頂いたことがあります．その時は2週間で返事をとのことでした．すべての自分のスケジュールを調整して,査読にあたりました．そのような経験をすると自分の論文もそのようにどなたかにより査読をされており，それはボランティアによることがほとんどなのだと分かりました．つまり科学は専門家の多くの献身的な精神や労力により成り立っていると言えます．査読をした方も自分たちもそのように育ててもらっているため，誰もがそのような精神でかつ全力で査読をしてくださっています．私たちは，そのような科学のシステムの中にいます．

理学療法の視点は我々にしかできない分野であり,その科学性を追求していくことも我々にしか出来ない使命でもあります．そして，その意義・目標は社会に貢献することではないかと思います．

学会発表ではその後問い合わせをもらうことはあまりありませんが，論文投稿では数年経った後からも問い合わせを受けることがあります．最初に書いた論文も医師を含め問い合わせを数件受けました．昨年数名のメンバーで作成した介護保険に関する研究報告も他市から論文を見てと問い合わせがあり，我々の取り組みが活かされるようです．このような経験から論文作成は，まさに社会貢献の一つであると感じました．論文を書くということは，そう言うことと私は思います．